

馴致に対する考え方

競走馬の世界で一般的に用いられている馴致という言葉は、「騎乗馴致（乗りならし）」の意味で使われることが多い。しかし、広義では、「競走馬としてデビューするために、必要となる数多くの物事に対する馴致」と捉えられる。

人を乗せて走ることは、競走馬として必須であるが、それのみでは十分とは言えない。手入れ、トレーニング、輸送、装蹄、ゲートなどの数多くの物事を、人とともに落ち着いて実施できるようになって、初めて競走馬としてのデビューが可能となる。このように捉えた場合、競走馬の馴致は生まれ落ちたときから、出走という目標に向けて始まっているといえる。

つまり、日々の馬への接し方が馴致である。このため取扱者は、馬に求める目標を明確に見据え、それぞれの時期に済ませなければならない躰（しつけ）や作法を、確実に積み重ねていくことが重要である。

○馴致を進めるにあたっての留意点

▶ Point : 馴致の留意点

- ① 人馬の信頼関係を築くこと
- ② 人が馬のリーダーとなること
- ③ 馬に経験を積ませること
- ④ 段階的に進めること
- ⑤ 明確な指示を発すること

1. 人馬の信頼関係を築くこと

馴致とは「馴らして目標とする状態に到らしめること」であり、馬を屈服させることではない。馬にさせるのではなく、馬がそうするように仕向ける姿勢が重要であり、要求に答えた時には、しっかりほめる必要がある（声でも愛撫でもよい）。すべてのステップにおいて、疲労困憊までに追い込むこと、不必要に驚かせてパニックに陥れることがあってはならない。

その第一歩は、人と一緒にいることで安心できる関係、雰囲気作りであり、この取り組みは生まれて間もない時期から開始する。馴致を滞りなく進めるために最も重要なことは、人馬の信頼関係の構築である。

2. 人が馬のリーダーになること

馬取扱者や騎乗者は、馬に接する際、常にリーダーであるように心がけなければならない。これは馬に恐れられる存在になることではなく、何か事が起こった際に、人の指示が尊重されることを意味する。

褒めて育てることは育成の基本であるが、それのみでは大きな体と強い力をもつ馬を躰することはできない。時には、毅然とした「No」という姿勢が求められる。特に、牡馬は自分がボスと勘違いする傾向をもっていることから、人に危害を及ぼすわがままに対しては、時として懲戒も必要となる。この時に、気持ちで馬に負けてはならない。逃げながらムチを使っても、何の効果もないのである。馬は、態度や表情で人の心を察知できる能力をもつことを知る必要がある。

牡馬には、人への尊敬を教えることが重要であり、そのためには何があっても動じない覇気が求められる。一方、牝馬に対する懲戒は逆効果となる場合が多く、注意が必要である。怖がっているのか、反抗しているのかの区別が大切であり、基本的にはやさしく接する。

3. 馬に経験を積ませること

競走馬がもてる能力を最大限に発揮するためには、大観衆の前でも冷静にスタートを切り、走行に集中する必要がある。草食獣である馬は新しい物事に対して非常に臆病であり、驚きやすい動物である。反面、自分に危害が及ばないことを理解すれば、かなりの物事に慣れる特性をもつ。例えば、アフリカの草原、ライオンのすぐ横を通り過ぎるシマウマの群れをイメージして欲しい。相手が猛獣であっても、満腹で危害を及ぼさないことを理解すれば、恐怖の対象ではなくなるのである。怖がるから避けて通るのではなく、競走馬として必要と思われることは、積極的に体験させて慣れさせることが重要である。

人が求める指示を馬が拒む場合は、怖がっているのか、わがままであるのかを、明確に判断する必要がある。怖がっている時には、時間をかけて落ち着かせ、理解させるように努める。この過程において、人馬の信頼関係はさらに強固なものとなる。その際の注意事項は、取扱者自身が落ち着いていることである。人がオドオドすると、馬も落ち着けないのである。また、馬の集中力はそれほど長続きしない（概ね20分）ことから、一度に同じ事を何度も要求しないことも重要である。

4. 段階的に進めること

馴致は、先々を見据え、段階的にステップを踏んで進める。人の都合で十分な時間をかけなかった場合、あるいはステップのいくつかを省略した場合は、トラブルが起こり、馴致の失敗として馬の心に大きな傷が残る。この失敗は、人間不信や落ち着きの欠如などとして、後々まで悪影響を及ぼす。また、馴致がイメージ通り進まないことに対する短気は、厳に慎むべきである。馬に対して人の感情や思い入れを押し付けるのみでは、良好な関係は築けない。

5. 明確な指示を発すること

馬に対する指示は、態度や言葉を正しく理解してもらわなければ意味がない。馬は、常にリーダーである人の感情を気にしている。基本的には明るく楽しく接するが、馬が好ましくない動きをしたときは、メリハリをつけて短く明確な指示を発する。指示を出すタイミングも、重要である。難しいことであるが、良いことをした後、間違ったことをした後ではなく、しようとした瞬間に明確な指示や態度を示すことができれば、馬はより確実に理解する。

6. まとめ：躰の原則

- ①馬が「良い」と「悪い」を理解していることが大前提であり、理解していれば、馬との必要最低限の会話は成立する。
 - 良いとき：
 - ・プレッシャーの解除、リラックスした態度と表情
 - ・愛撫、優しい声、褒美（餌）
 - 悪いとき：
 - ・プレッシャーの継続（時にさらに強く）
 - ・厳しい態度と表情、きつい声
 - ・注意を喚起する声
- ②馬に覚えさせたい動きや行動を理解させづらい場合、声などの合図（コマンド）に併せて物理的な扶助を用いる。

物理的な扶助：ムチ、圧迫、痛み（つねる）
- ③物理的な扶助がなくても、コマンドに反応できるように反復訓練する。
- ④コマンドによって、馬が自ら進んで行動をとるようになれば、躰の完成である。

7. ホースマンとは

これまで述べた馬の馴致から、ホースマンに求められる資質は以下のとおりである。

- ①馬に対して、その将来を期待すること
- ②馬に求める目標を明瞭かつ具体的イメージすること
- ③その時々馬の状態・能力を確実に把握・理解すること
- ④段階を踏みながら、安全かつ無事に目標に導くこと